KIS§ICK

- Love is -

shiroa

＜序＞

愛を語るのは難しい。
身近であるはずなのに、昔から存在するはずなのに、

”愛とは？”という疑問には明快に答えることができない。

だからこそ曖昧で、人それぞれ形が違うのかもしれない。

キリスト教が日本に普及する際、”ＬＯＶＥ”という単語に当てる日本語に困ったという。
最終的に”愛”が選ばれるわけだ。
そしてキリスト教的”愛”と日本古来から使われてきた”愛”の意味が混同し、現在の”愛”に姿を変えた。

上杉の知将、直江兼続が兜に”愛”という言葉を掲げていたのは有名だが、
今で云う愛とは意味合いが異なると考えるべきだろう。
詳しい違いは、私には分からないが。

また、”愛”と”恋”はまったく意味合いが違う。
その違いはここでは述べないが、此度の八編の小さな物語は、七人の主人公による、恋と愛の物語。

七人の恋模様は、時に重なり、時に影響しあい、紡がれる。

この小さな箱庭の”恋”を、ゆるりと楽しんでいただきたい。

では、しばしの旅を。

Love is "heart". actress　: yoshiko

高校への登校途中、いつもの交差点で、彼はつまらなそうな顔をして遠くを見ている。
あたしはそんな顔をみるのが好きだ。
いつしかその顔をみるのが日課になり、早起きが好きになった。

学校の男子にはあまりときめくヤツはいない。
なんか、みんな子供に感じる。
ゲームとか漫画の話ばっかりしててさ。
もうちょっと大人になんなよって感じ。

交差点のあいつは、きっとバスケ部だ。
背が高いし、なにせ鞄にバスケットボールのキーホルダーをつけている。
どうしてあいつ、うちの高校にこなかったんだろう？
受験前にもし出会っていて、どの高校にいくか判ってたら、絶対追っかけて受験してたな、あたし。

友達のサツキは云う。
”恋は突然始まる、なんの前触れもなく”と。
どこかの誰かが言った言葉か知らないけど、妙に説得力がある。
恋多き乙女は、今日も誰かに愛を配る。
あたしが知ってるだけで、付き合った彼は五人はいる。
付き合うにいたらなかった”未遂”を合わせると、星の数ほど。

関心、あたしにゃ〜真似できない。

心が通う相手が一人いれば、十分だ。
……それとも、付き合っているうちに浮気のひとつもしたくなるものなのだろうか。
幸いまだあたしはキレイだ。
大人になり穢れを知っていく定めだとしても、まだまだ高潔でありたい。

交差点のあいつはよほど鈍感だ。きっとあたしの存在に気付いていない。
もうすぐ夏休みも近い。あたしの存在を、あいつにそっと報せねば。

小学四年生の頃に見つけた四つ葉のクローバー。
中学一年の図工で、それを押し花にして、梳いた再生紙で栞を作った。
高校一年の時文化祭で使っていた学校の備品で、それを綺麗にラミネートをして宝物にしていた

んだけど。

あたしはその栞の頭にパンチで穴を開け、グリーンの細いリボンをつけた。
うん、可愛い。
栞の左下には”koikoiusagi”とポップな文字で名入れした。
鈍感なあいつ、気付くかな？

暑い朝、行き交う交差点。
つまらなそうな顔で、いつものように遠くを見ている彼。
あたしはそっと、鞄の隙間に四つ葉の栞を差しこんだ。

わずかな期待と、心を込めて。

Love is "cool". actor : takahiro

右も左も女の話。
女が嫌い、なわけではない。
今は部活と勉強で精一杯だ。

大会に向けて体を絞り込み、技術を磨き、チームをひっぱっていかないと。
やる気のないメンバーに辟易し、低俗な話題ばかりで盛り上がる。
あいつら、本気でバスケうまくなりたいのか？　って思う。

むしゃくしゃする。
その気持ちを発散させるのは、やはりバスケだ。

シュートの瞬間、そこに俺のカタルシスがある。

いつもではない、時々なんだ。”音”が止まる瞬間がある。
頭の中がクリアーになり、どんなに距離があって、どんなに困難なシュートであっても、
”入るんだ”と直観する。

その瞬間が訪れる時、少しずつ溜まっていたイライラがふっと嘘のように軽くなるんだ。

ヒロヒコは口を開くと女のことばかりだ。
まだ、付き合ったことはないらしい。万年、振られっぱなしの哀れな男。
たぶん、女に近づこうとすればするほど離れて行くから、余計に焦がれるのだろう。

俺があまり女を気にしてないのは、付き合おうと思ったら、いつでも付き合えるからかも知れない。
そっけなくしてるのに、時々付き合ってくれと告白される。

悪い、俺、バスケで忙しいから。

そうやって断る。
女友達はいなくはない。クラスメートで話す程度だけど。
そいつらから言われたことがあったな。
「誰かひとりと付き合えばさ、誰も告白しなくなるんじゃない？」
その発想がナンセンスなんだ。
付き合うって、縛られるってことだろ？

バスケでそれなりに成績を残したいと思っている。
トップ選手はまぁ無理だろうが、半端な気持ちでやってるわけじゃない。
俺はそんな器用な男じゃないから、そういう荷物は背負えないんだ。

寝不足気味の瞼をこすりながら席につき、鞄を開けた。
今日使う教科書とノートを机にしまおうと手を突っ込むと、見馴れない栞が出てきた。

いつ入れられた？
俺は握りつぶそうかと思ったが、２秒だけ考え、鞄の小物入れへ仕舞った。

Love is "empty".　actress : yuki

恋は水色。恋人はワイン色。
……あたしの愛は、からっぽ。

ちぇ。またふられた。
恋をしたんだ、て思える。恋人に振りむいて欲しいと思うから、告白する。
けど、なかなか振り向いてくれない。別に高望みはしてないと思うのになぁ。
こんなに人を愛したい気持ちでいっぱいなのに。それを表現する相手がいない。

我ながら不憫だ。

クラスメートのヨシコは偉い。
他校の生徒に片思いしているけど、相手に伝わらなくても、思い続けているだけで幸せなんだって。
その相手がみんなの人気者ときているから、ヨシコの恋が実ることは難しいだろうけど。

彼女はかわいい。
可憐、おしとやか、色白、小顔、爪が綺麗、二重瞼、笑うとエクボ、おしりのラインが綺麗……。
その気になれば、彼氏なんていくらでもできるだろう。

あたしはそうはいかない。
おおよそヨシコの特徴を反対にすれば、あたしになる。

はぁ。女子高生、この肩書の間は女の子はプレミアムが付くってのは嘘だ。
プレミアムが付くのは、標準以上の女の子。
標準に満たないあたしたちは、愛したいけど愛されない症候群として悶々としている。

いっそ、学生の本分の勉強に打ちこんじゃえば気にもならないか。
そう思って勉強に打ち込んでみたことがあるけど、

　”絶対彼氏と励まし合いながら勉強した方が、あたしは勉強がはかどる！”

とある時なぜか悟ったものだ。
なぜそう思ったのか分からない。きっと、人一倍愛したい気持ちが強いからなのだろう。

誰かがいて、その人の為に頑張る、それはとても力になる。
けど、自分のために努力するのって、苦手なんだよなぁ。

ふられた夜は、ポジティブな恋の歌を熱唱することにしている。
すると気がすかっと晴れて、また別の人を好きになる準備ができる。

きっと、いつか。運命の人と出会えるさ！

歌の歌詞はあたしを勇気づけてくれる。”Love is Full!”と叫べる日が来るといいな！
それまではせめて、夢見る少女でいてもいいよね。

Love is "blue".　actor : hirohiko

高校生になれば、自然と彼女ができるんじゃないか。
そんな淡い期待をもっていた。

朝、自転車に乗って学校に向かう。
他校の生徒とすれ違う中で、いつか誰かに声を掛けられることがあるんじゃないか。
――実際にはそんなことは起きない。

ロッカールームで僕のところに、そのうちラブレターが入ってるんじゃないか。
――そんなことは起きない。

放課後、帰ろうとしたら呼び止められ、一緒に帰ろうって誘われるんじゃないか。
――やっぱりそんなことは起きない。

僕も悪い。なにせ、期待するばかり。
期待しては裏切られる。
そもそも期待しなければ、裏切られることなんてないんだから。

なんで高校生になり、こんな受け身に期待ばかりしているのか、理由はある。
かつて僕も中学生のころは積極的にアタックしていた。
好きになって告白しては、ふられ、クラスメートに冷やかされ、まわりの女子にバカにされた。

めげずにどんどんアタックすると、変な噂が流れた。

”あいつは女好きだ”　”誰でもいいんだ”　”触れると妊娠するよ”

その噂は僕と女子の間にあるクレバスを確実に広げた。
僕は学校に行くのが嫌になったけど、表向きはなるべく平常を装った。

高校にいけば、こんな噂、リセットされる。
今を耐えればいい。そうすれば高校生になって、自然と彼女ができるんだから。
ひとつ上の仲が良かった先輩は語ってくれた。
「大丈夫、高校いけば彼女くらい簡単にできるって」
この言葉は僕にとって希望だった。

結局、高校生になっても状況は変わりはしない。

僕によってくる女の子もいないし。気になる子はいるけど、声をかければきっと中学生の二の舞いだ。

ただただ、普通に生活している。それなのに、心は傷ついていく。
期待してしまって、期待の分だけ、何もしないのに傷ついていく。
思春期の心理って、なんてへんてこなんだろう？

クラスメートのユキが、また男にふられたらしい。
お世辞にもけっして可愛いとはいえない女の子だ。けど、いつも笑顔で、声が明るい。感じのいい女の子だと思う。
ユキもふられると、傷つくのだろうか。……それは、傷つくだろうな。
もしかしたら、僕の気持ちも少し分かってもらえるかもしれない。

放課後、僕は勇気を出し、帰宅の支度をしているユキに声をかけた。
「ねぇ、よかったらちょっと付き合ってくれないか。話したい事があるんだ」

――その時の彼女の目の輝きは、多分一生忘れられないだろう。

Love is "passion".　actress : satuki

「ねぇ、つきあって」

単刀直入にいう。私は遠まわしが嫌いだ。

日本人はどうしてこう恋とロマンスをごたまぜにしたがるのだろう。
結局、一人よりも二人の方が寂しくないし、
一人で遊ぶよりも二人で遊んだ方が楽しい。
同性よりも異性と一緒の方が嬉しい、とか。
恋とはそういう論理ではないかと私は思っている。

中学生、高校生と、気になった男とは付き合ってきた。
同年代の男は子供だ。こいつは興味深い、と思ったら簡単に釣れる。
まだ女と付き合ったことのない、キスもしたことのない男が多い。
進んだ女、そう思われている私に、男はひょいひょいついてくる。

中学生の終わりごろ、私は軽い女と陰口をたたかれたものだ。
モテぬ同性からのひがみだ。つまらない。

別に軽いわけではない。探求が真理だ。

科学者が自分の分野をたゆまぬ情熱で探求する。
時間を、青春を、金銭を、家族を。すべてを犠牲にして探求する。
そして一握りの科学者が成功を収めるのだ。
私にとっての恋はそれに似ている。

男の探求、それは否だ。自分の探求といおうか。……いや、違う。
人だ。人についての探求だ。

残念なのは、私が百戦錬磨であることだ。
時に告白してふられることもあるが、特別恋の痛手を味わったことがない。
プロのスポーツ選手が、負けを見越した勝負に負けても良しとする心理に近いかも。
この試合に負けても、もっと大きな大事な試合で勝てば総合的に優勝に順位が近づく。
それが見えていればふられてもそう、痛く感じない。

一度ふられて、百年の恋が終わったと嘆く女が周りにいるが、バカみたい。

大人になれば、大人の恋愛が待ってるはずだ。
右左のおばさんをみれば、よっぽどじゃなけりゃちゃんと結婚できるってわかる。
あんた達が憧れる”運命の人”ってヤツにね。

「サツキは本当の恋を知らないのよ」

そう言われることがある。そいつがいうのが本当の恋なら、そんな恋、別に要らない。
今ので十分。
食事が喉を通らなくなって、手首を切りたくなるのが本当の恋なら真っ平ごめんだ。

そんな私が今気になる男がいる。
隣のクラスのタカヒロだ。バスケ部のキャプテン。
背が高くてルックスがいいのに、女はまだいないらしい。

そろそろ今の男も底が見えた。別れ時か。ふふ。
タカヒロは私に、どんな恋の形を示してくれるだろうか。楽しみだ。

Love is "sweet". actor : toshi

「ねぇ、手をつなごう」

学校の帰り道、いつもと同じ屈託のない調子でサツキはせがんだ。
僕は「うん」と頷きそれに応える。

ぎゅっと、手を握ると。力が湧いてくる。

柔らかく、加減をしないと壊してしまいそうな、小動物のような手。
ずっと一緒にサツキといられるといられますように。
僕はちっとも信じていなかった神様にお願いをした。

「ねぇ、もっと聞かせてよ」
はじめてのデートで、そうサツキが言った時には、さすがにびっくりした。
女の子とどんな話をしたらいいか分からず、もじもじしている僕に、彼女は助言を与えてくれた。
あなたが好きなこと、興味があることを話して、と。
そして僕はあろうことか数学の話を語った。
サツキが理解できているかどうか、分からなかったけど、黒い瞳で興味深く聞いてくれるサツキに、僕はついつい饒舌になった。
虚数とπの関係についてひとしきり語り終わり、サツキはきっとつまらないと思ってるだろうな、とちょっぴり反省した。
そこで、サツキがいった言葉は「ねぇ、もっと聞かせてよ」。
数学が嫌いな女の子の話はよく耳にする。数学なんてなければいいのに、なんて罰当たりなことをいう子もいるのに。

もしも、僕のことを理解してくれる女の子が身近にいるとしたら、彼女しかいないと思った。

家で一人で勉強する時も、温かい気持ちになれる。
数学の問題集を解き、数式のその奥に秘められた歴史に思いを馳せる。
今まではそれが最上の楽しみ、僕にとっての趣味だったけど。
この物語をどのようにサツキに伝えようか、サツキは楽しんでくれるだろうか。
明日、また会えるのが楽しみに思える。

「ガロアという数学者がいるんだ。代数学の理論、ガロア理論の提唱者なんだけど。
彼は若くして決闘で命を落とす。その決闘の前日に友人に宛てた手紙を書くんだけど、

その手紙の中にガロア理論が語られていたんだ」

人間が発展していく過程は、数学が発達する過程と比例している。
今の人類の生活を支えているのは数学だといっても、過言ではないだろう。
そして、文学と言われる数学と対局のように思われる学問に於いても、数学は欠かせない。
こんな話を、僕は延々と語った。

「この夏、どっか遠くにいこうか」
僕は言った。
うん、とサツキは頷いた。
さっぱりと甘い時が流れていた。ずっと、ずっと、壊れないと、僕は信じて疑わなかった。

Love is "hurts". actress : kanako

彼を見ているだけで、胸が疼く。

いけないことだと解っているのに。
いえ、むしろいけないことだからかしら。

高校生の男子に憧れていた。私の精神は少し狂っているのかもしれない。
結局相手にされず、年上の相手ばかりと付き合ってた。
恋だと思える恋は少ない。
好きになって、夢中になった矢先、男は私を捨てる。

「他に好きな子ができた」とか。
「君は自分より、もっと素敵な人と一緒になるべきだ」とか。
そんな言葉をかけられても、私は解っている。
結局、私に飽きただけ。
おもちゃのひとつくらいにしか考えてないのよ。

ある程度、男との距離は割り切って考えていた。
こうして高校に戻ってきて、まさか恋をするなんて思っていなかった。
ましてや年下の相手。
興味すら覚えるなんて思ってもいなかった。高校生の男子だからって。

どうして彼はあんなにいつもつまらなそうな顔をしているの。
あれだけ綺麗な顔立ちなら、女の子も望むべくもないだろうし。
成績も優秀。バスケ部では実力随一。
眠そうな目、重たそうな瞼から覗く瞳は、どこを見てるのかしら。

教え子に恋をするなんて、痛すぎる。

声すら掛けられない。付き合ってと声をかけようなんて思わない。
徒花（あだばな）。ただの不毛な恋。
こんな恋、しない方がいい。
感情が揺さぶられるだけ損だ。
授業中に次に言おうとした言葉が出なくなることがある。
仕事の邪魔。

ほんと、悪影響しかない。
しかも発展性がない。

バカ。恋なんて感情、なければいいのに。

Love is "life". actor : takahiro

塾での勉強中、ふと気になった。
四つ葉のクローバーの栞。

いつだっけ、幼稚園の頃だったか。河原の土手で必死に探したけれど、見つからなかった。
不思議と女の子はあっちこっちで「あった」「みつけた」と歓喜の声を上げていた。
見つけられなければ見つけられないほど、
俺の人生において、四つ葉のクローバーは存在してはいけない物に感じた。
次元が違うもの、女の子の前では現れるかも知れないが、俺には近づいてくることすらないもの。

必要がない。だから、俺が触れることはない。

執着し、そこに時間を掛けることはばかばかしい。そう思い、四つ葉のクローバーを探すのをやめた。

時を経て、その四つ葉のクローバーが、今鞄の中に入っている。
なぜ今頃俺の人生に交差してきたかは謎だ。一体誰が入れたのか？

まぁいい。俺はそんなことに意識を割く余裕はない。
バスケと勉強。今はそれに集中する。遊ぶ時間は大人になればいくらでもあるだろう。
俺は栞の事を忘れ、勉強に集中した。

塾の帰り、電車に乗っていると、ちらちらと俺を見る女子高生が気になった。
前にも見たことがある子だ。また、俺を見て、勝手に想像力を働かせているのだろうか。
俺の内面も、人間性も知らず、女は勝手に俺を”理想の男”と重ねる。
もしも付き合ってひととき幸せを感じても、次第に理想と違うことに気付き、遠ざかっていくだろう。
ならばはじめから相手をしない方がいい。俺はあいつらのおもちゃじゃない。
理想ごっこに付き合うほど、俺には余裕がない。

と、そこでまた四つ葉のクローバーが頭をよぎった。
まるで呪文だ。恋は今俺に一番不要なものなのに、どうしてこう付きまとう？

捨ててしまえば考えもしなくなるだろう。次の駅に着いたら、捨てるか。
俺は栞を手に取り、ぎゅっと握りしめようとした。

と、栞の左下に文字が書かれているのを見つけた。”koikoiusagi”、ポップな手書き。
何かの暗号か？　気まぐれで書いた文字列か？
手書きで書かれた文字を見ると、握りしめようとした手から力が抜けた。
”心”がこもったものは、安易に壊せない。

やれやれ。これは暗号を解かないと先に進めそうにないな。

俺は観念して栞の謎を解くことにした。たまには息抜きにいいだろう。

まず栞を入れた相手は女だということ。男は考えにくい。
入れたのは登校中であること。昨夜は鞄に入っていなかった。
疑問はどうしてラブレターではなく、栞なのかということ。
ラブレターなら、誰からか分かる。栞、しかも名前か戯れか分からない文字列。
好きな人に自分のことを認識してもらいたくないのか？
……いや、そんな子はいないはずだ。
心の片隅にでも、自分の存在を認めてもらいたいはずだ。
”koikoiusagi”は手書きで書き足した文字列だ。
――もしかして、これが手掛かりで、何かしらの方法を使えば、栞を入れた当人が分かるかも知れない。

☆　★　☆　★

夜、パソコンを開いた。
思い当るキーワードでひたすら検索をかけていった。
そして”ＬＬＲ”と入力し、ようやく行きあたった。

ブログのタイトルが『ＬＬＲ』。管理人は『さっちん』だった。
今日更新したブログを読み、俺は「ビンゴ」と言って指を鳴らした。

　あたしはその栞の頭にパンチで穴を開け、グリーンの細いリボンをつけた。
　うん、可愛い。
　栞の左下には”koikoiusagi”とポップな文字で名入れした。

　鈍感なあいつ、気付くかな？

　暑い朝、行き交う交差点。
　つまらなそうな顔で、いつものように遠くを見ている彼。
　あたしはそっと、鞄の隙間に四つ葉の栞を差しこんだ。

間違いなく”鈍感なあいつ”って俺の事だ。
登校中の交差点、信号で待っている時、たいてい同じ顔が揃っている。
あの中にいる女子のうちの一人が、この”koikoiusagi”であり、”さっちん”なのだろう。
これだけ判れば十分。明日、”koikoiusagi”が誰なのかは簡単に特定できるだろう。

さっぱりした。面白かった。これで勉強とバスケに集中できる。
俺は今日の課題を揚々として仕上げ、たっぷりとお風呂につかって寝た。

☆　★　☆　★

信号待ちの交差点。いつものメンツが揃っていた。
いつも道路側に突っ立っている俺は、くるりとふりかえり、おどけた調子でこう言った。

「らーびん、らーびん、らびっ」

ひとり、目を丸くした女の子がいた。「ビンゴ」俺を彼女に指をさし、頬笑んだ。
「Ｌoving　Ｌoving Ｒabbit、恋恋ウサギ。ずいぶん遠回りだったね」

俺と彼女の周りの人は、まるで奇跡を目撃するかのような視線で、俺たちを見ていた。

＜結＞

すべての結末はあなたの主観に委ねられている。
それは時に残酷な結末であり、時に幸福な結末だろう。

私はいつも疑問に思う。ハッピーエンドって何？　と。
もしも物語の最後で幸福な結末が待っているなら、それはハッピーエンドである。
でも、その主人公たちの２年後、５年後はどうだろう？

　幸せでいつづけることはできるだろうか？

チェーホフは「かもめ」という主要人物が自殺をする物語を「喜劇」として書いた。
残念ながら真意はわからないらしいが、悲劇、喜劇は実に曖昧な線引きといえる。
どこで物語を区切るのか、それでも変わるだろうし、作者が描かなかった部分に、違う意図が潜んでいるかもしれない。

とはいえ。
あまり難しいことは考えず、気楽に楽しんでいただきたい。
気にいった物語があれば、それだけ抜き出して、大切にして欲しい。

それが生れてきた”物語”にとって、とても幸せなことだから。